物を申せば
心底もきこえ、
また、人にも
なおさるるなり。
ただ、物を申せ。
（御一代記聞書）

大寄おゝより小寄

発行
真宗大谷派　小松教務所
小松市小馬出町26
〒923-0904 TEL. 22−0555
発行者　亀渕　卓
編　集　教報編集委員会

『大寄小寄』発刊に寄せて

小松教区教化委員長　亀渕 卓

現在、東本願寺から発行されている『真宗聖典』には、親鸞聖人のお手紙、つまり御消息が重複を除けば四十五通納められています。このほとんどが、関東の門弟の方々に宛てて書かれていて、その内容はご信心に関わる門弟からの質問にお応えになるものが大方となっています。例えば、

四月七日の御ふみ、五月廿六日たしかにたしかにみ候いぬ。さては、おおせられたる事、信の一念、行の一念、ふたつなれども、信をはなれたる行もなし、行の一念をはなれたる信の一念もなし。…（中略）…これみな、みだの御ちかいと申すことをこころうべし。行と信とは御ちかいを申すなり。あなかしこ、あなかしこ。いのち候わば、かならずかならずのぼらせ給うべく候う。

五月廿八日　（花押）

覚信御房御返事

（「御消息集」一四　聖典p五七九）とあって、このご消息は当時、下野国高田に居住していた有力門弟の覚信房に宛てたものとわかります。この覚信房の名前は「門侶交名牒」に見えることから、当時の門徒集団のリーダーの一人だったことがうかがえます。

さらに、日付を見ればわかるように、下野国ですから現在の栃木県で四月七日に覚信房が書いた質問のお手紙が、「十余か国のさかいをこえ」て親鸞聖人のお手元に届き、お読みになられたと思われるのです。

そのようなことをもろもろ計算してみると、関東のお弟子から京都の聖人のもとへ、そして京都の聖人から関東のお弟子へと聖人のご信心のお声が届けられるまでにながい時間がかかっていたことが容易に知られるのです。

しかも、このようなお手紙によってお尋ねになることだけではなく、時には門弟方が聖人へのご寄進のものを持ってのが五月二十六日のことです。そして聖人は、このお手紙のご返事を五月二十八日にしたためられています。覚信房からのお手紙が二ヵ月近くかかっているのは、当時の状況としてもすこしかかりすぎとは思われます。そのような諸事情を考慮しても聖人のご返事は、おそらく七月の中頃までには確実に覚信房の手元に届いたのではなかったかって京都まで訪ね、聖人と濃密な時を過ごし、聖人のお声を携えて関東へ帰って行かれたことも多々あったように見受けられるのです。それだけの時間がかかっても、なお聖人から大事なお教えをいただきたい、との一念が門弟方をしてこのようにせしめたのではないかと、御消息を拝読していてひしひしと感じられるのです。

そして親鸞聖人は、多くの人にこの文を読み聞かせてほしい、と必ずと言っていいほど書き記しておられます。この聖人の姿勢は、歴代の宗主（しゅうしゅ；現在で言えば門首）を経て蓮如上人の『御文』として結晶してきたのではないでしょうか。

今回、教区教化委員会から、教化広報紙『大寄小寄』を隔月刊として発行することになりました。「大寄り小寄り」とは言うまでもなく、この小松教区内に永く伝統されてきた「お講」の形態を言い表す言葉であるとともに、教えが確かに伝えられてきたことを証しする言葉でもあるように思います。

今この『大寄小寄』では、とても『御文』のような訳にはいきませんが、教区で催された様々な聞法会の模様をお伝えし、また親鸞聖人み教えについての領解もお伝えしたいと考えています。

願わくば、お読みになってのご感想やご質問などを寄せていただきたいと思います。そして、それを紙面に反映していくことができれば、親鸞聖人のお心の万分の一でも表現していけるものと思います。どうかお育てをいただきますように。

「濁世の目足」

親鸞聖人がお書きになられたものの中に「濁世の目足」というお言葉があります（『浄土文類聚鈔』・聖典四〇二頁）。「濁世」というのは、濁りに染まった世の中。この世の中のことを、そう呼んでくださいます。濁っているというのは、本当に大事なことがなかなか見えないということです。あっちでもこっちでも「あれが大事や、これが大事や」と言っています。宗教をとってみてもそうでしょう。あっちでもこっちでも宗教というのは筍の数よりもあるかもしれません。ボコボコ出てきます。どれが本当に我々の生きる力になる教えなのかということも分からない。これが濁っている世の中、「濁世」です。何が大事かが見えないという意味であります。そんな世の中にあって、浄土の教え・念仏の教えは、私たちの目であり足であるというふうにおっしゃったのが親鸞聖人です。これは、「愚（おろか）」であることがはっきりしておられるから、教えが目になってくださる、足になってくださるのだというふうにおっしゃるんですよ。

「自分の目の方が確か」？

私たちは、「自分は賢い」「間違っていない」と思っている間は、仏法が目になるとは思っていません。自分の目の方が確かだと思っているんですね。だから、「仏法がなくても生きていける」「そんなものを聞かなくても日暮しできる」と思うわけです。ところが私たちの目は残念ながら、その時その時の自分の便利さとか都合・利益で動いていきますから、右に流され左に流されるわけですよ。そして、結局「何が大事だったんやろか」と分からないようになっていくのです。この教えがなければ、生きていく目もなければ足もないとおっしゃられたのが親鸞聖人であるということを確認したいのです。

〈講義録〉社会を見つめる眼（まなこ）

大谷大学助教授　一楽　真

闇を生きていた

「なぜ浄土の教え・念仏の教えが、世の中を見る目になるのか」ということですが、浄土の教えを聞けば、そのようにはなっていない私の生き方がはっきりとするということです。浄土を光の世界に喩えてくださいますが、浄土が全てのものがよく見える光溢れる世界だということは、私たちの日頃は何にも見えない闇を生きていたということがはっきりするということです。浄土に触れる、浄土の教えに出遇うということは、こちら側の日頃の生き方がはっきりするということと一つなのです。

仏さまを中心に生きる

私達はいつも勝ったか負けたかという世間のモノサシに右往左往するのですが、そういう私達に「あなたたちの生きるべきいのちは、こういういのちだ」ということを教えようとする。これが阿弥陀仏であります。私たちは、日頃は世間の価値観で測ったいのちを中心にしています。はっきり言えば、欲と二人連れで生きているのです。そうではなくて、仏さまが教えるような世界を生きていく。仏さまを中心に生きていくというのが、浄土の生き方であり、「南無阿弥陀仏」の念仏の道であります。

この講義録は、昨年四月十日開催された小松教区仏教青年会主催の公開講座「道標（みちしるべ）」での講演から抜粋したものです。文章に関する責任は編集委員会にあります。

書籍紹介

『生きる力』　梶原敬一著

著者は兵庫県にある姫路医療センターの小児科医であり、かつ真宗大谷派教学研究所の嘱託研究員でもある。

表題の「生きる力」について著者は、「絶望しても生きていけるのは、私の中にある生きる

郡中御影報恩講　7月23日（日）細工町本蓮寺にて

私にとって宗祖とは

小松教区 教学研究室「郡中学舎」
第一期 修了生
白山市 湊町 願隆寺住職　土佐　明

武内義範という先年亡くなった宗教哲学者は自らの著述の中でしばしば次のような話を引用している。

ある人がジャングルの中で道に迷った。右往左往していると偶然、古径に行き当たったのでそれを辿って行くと古城に出た。それは立派な都城であるものの、今は誰も住んでいない。彼は帰って王や宰相に報告し、そこに都を造らせた。その都城は後に栄えることになった。

この話はとある原始仏教の経典の中にあるのだそうだが、その経典がこのような比喩物語によって説こうとしているのは、釈尊の教えは釈尊自身が開いた悟りの道であると同時に古仏の道でもある、ということだ。「古径」とは縁起・四諦・八正道の教説のことであって、釈尊はそれをもう一度発見したに過ぎない、といっているのだ。

親鸞聖人は浄土真宗の宗祖だといわれるけれども、その「浄土真宗」というのはまさにそのような古径だったのではなかろうか。

当教区の教学研究室「郡中学舎」の第一回の講義の中で一楽室長は、私たちが宗祖と仰ぐ親鸞聖人自身が「宗祖」に出遇われた方であったことを指摘された。『教行信証』後序で「真宗興隆の大祖源空法師」と述べられているように、親鸞聖人にとっては法然上人が真宗の宗祖なのであって、親鸞自身が真宗を開いたのではない、と。なるほど、法然上人はそれまで寓宗に過ぎなかった浄土宗を独立した一宗として開立したのであり、親鸞聖人の生涯のお仕事は師法然が興行したこの浄土宗を真宗として顕かにすることであった。

しかし、法然上人自身も宗祖に出遇われた方だったといえるだろう。浄土宗独立宣言の書ともいえる『選択本願念仏集』の中で上人は「善導和尚は偏に浄土をもって宗とし、しかも聖道をもって宗とせず。故に偏に善導一師によるなり」と断言されている。法然上人は黒谷の経蔵の中で、浄土の教えを宗とする祖師としての善導と出遇われたのだ。

おそらく善導大師にしてもしかりであろう。「弥陀の本願まことにおわしまさば、釈尊の説教、虚言なるべからず……」という『歎異抄』の有名な一節がここで想起されよう。浄土真宗は親鸞聖人によって作り上げられたものではない。それはいわば「弥陀の本願まこと」に発源する一本の古径である。この道の上で聖人は宗祖と出遇っていったのだ。

ただ、私たちにとって親鸞聖人は、他の祖師たちと並列させることができない方である。なぜなら、聖人が歩まれた道は過去の祖師らも歩まれた道だといっても、その古径は聖人が歩まれたことによって、現在の私たちの前に一本の道として立ち現れているからだ。

武内は、「歩む道というのは、また歩むことによってできている道である」とも語っている。深き森の中を通る道は、行き交う人がいなくなれば八重葎（むぐら）の中に隠れてしまい、ついには廃れてしまう。浄土真宗という道は、親鸞聖人が歩まれたからこそ私たちの歩む道となりえている。私も宗祖としての聖人に出遇い、この古径、「無碍の一道」の歩みをなすことにしよう。

力が私を支えてくれているのではなく、時代と社会にある生きる力が支えてくれているからです。」と述べている。

しかし一方で現代社会をよくよく見れば、この時代と社会が人の生きる力を奪うものになってしまっていることがわかる。そのような社会を私たちは作ってきてしまったのである。なぜなのだろうか。

私たちは苦悩がなくなれば幸福になれると思い込み、人知を尽くして苦悩を消し去ることに邁進してきた。時として宗教すらもそのために利用しようとしている。しかしそこに根本的な間違いがあったのではなかろうか。

苦しみ悩みを消し去ろうとすることによって、苦悩を生きる人間全体が見えなくなり、生きる喜びも喪われてしまった。それが現代という時代ではないか、と著者は書いている。

真宗の仏事 Q&A

Q なぜ真宗では「清め塩」を使わないのですか？

A　私たちには、死や病など、身の回りに近づいてほしくないものがあります。しかし、決して逃れられないことを知っているはずです。ところが、その厄介者を振り払う道具として、塩を使っているのではないでしょうか。

死や病は本当に清めなければならない、いわゆる「穢れた」ものなのでしょうか。とすれば、いくら生前輝かしい人生を過ごしたとしても、結末は穢れに終わることになります。こんな考え方しかできないとすれば、非常に残念なことです。

仮に、あなたの死によって清めなければならない人を生み出すことになったらどうでしょう。それがあなたの子供や孫であったとしたら、とても悲しいことではありませんか。

なにげなく行っている「清める」という行為が、知らぬ間に人間の存在そのものをも否定しかねないことであるのかもしれません。

さらには、私たちが生活の中で抱え込んでいる罪業は、塩程度では消し去ることなどできないことは改めて言うまでもありません。

教化事業

◇**公開講座**
日時　六月四日（日）
　　午前十時～十一時三十分
会場　小松教務所
講師　訓覇浩師
講題　ハンセン病から
　　見えてきたこと
　　～人が救われるとは
　　どういうことか～

◇**御同朋御同行のつどい**
日時　六月六日（火）
　　午前十時～午後三時
会場　小松教務所
講師　春秋賛師
テーマ　今、いのちがあなたを
　　生きている
備考　昼食に軽食（パン・牛乳）
　　をご用意いたします。

◇**新屋英子ひとり芝居**
「身世打鈴」シンセタリョン
期日　六月十日（土）
時間　①午後二時三十分～四時
　　②午後七時三十分～九時
会場　称名寺
チケット　二千円

◇**カルト問題の研修会**
日時　六月十四日（水）
　　午後二時～四時
会場　小松教務所
講師　滝本太郎氏（オウム真理教被害対策弁護団弁護士）
講題　カルト宗教の実態
備考　組門徒会員（重世話方）一泊研修会（六月十四日～十五日）と兼ねて実施。

◇**郡中学舎研修会（教研）**
日時　六月十九日（月）
　　午後一時三十分～八時三十分
会場　小松教務所

◇**公開講座**
期日　七月八日（土）
会場　小松芸術劇場うらら
講師　森達也氏

◇**教区帰敬式（おかみそり）**
日時　七月二十二日（土）
　　午後一時～四時
会場　小松教務所

◇**郡中御影報恩講**
日時　七月二十三日（日）
　　午前九時～午後三時
会場　本蓮寺

編集後記

この度教区教化委員長の発案により、従来年一度発行されていた教報に加え、隔月で教化広報紙を発行することになりました。教報が主として教区の行事報告を中心としているのに対し、この教化広報誌は教化的内容をより多くしたものにしたいと考えております。

この広報誌の名称を決定するにあたって、編集委員各自の頭にまず浮かんだのは、「この小松教区の歴史と将来への展望を合わせて表現することのできる名称」はないだろうかということでした。そしてそれは自ずから、「お講」を表現するものでしかあり得ないということになりました。

最初は蓮如さんの御文（帖外）にも名前の出てくる「能美四講」が候補になりましたが、「かたい」ということで却下。あれこれ名前の挙がった中で結局「大寄・小寄（お～よりこより）」のひらがな付きにおさまりました。題字の揮毫も編集委員の一人が担当しております。

少しでも読みやすい紙面にしたいと思いますし、写真や挿し絵なども色つきで載せられるようにしていきたいと考えています。皆様のご意見をお聞かせ下さい。